

淫獄の レディ・リベリオン



試し読み版

三津谷鷹介

表紙イラスト：みかん。

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『淫獄のレディ・リベリオン』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



三津谷鷹介
表紙／みかん。

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

アイラ

現在の世界の統治システムに疑問を持つレジスタンスメンバー。メンバー内でも随一の戦士としての素質を持っている。

ハクト

アイラと同じレジスタンスのリーダーを務めている。アイラとは恋人関係にある。

カーシャ

人間統治システム『至高の慈父』の手足となり市民の管理、またその支配に逆らうレジスタンスを弾圧する環境整備局の実働部隊員。『整備局の蛇女』の異名を持つ。

灰色のビル。灰色の空。そして、灰色の人々。

アイラが生まれてから十数年を過ぎ、そして捨てた世界には、昔も今もその一色で塗り潰されているような無表情な印象しかなかった。

(本当に、この都市は変わらない……。いや、変わる事が許されないんだ)

背中を丸めてうつむき、影法師のようにゆるゆると歩く人々に紛れ込んで、同じように無気力で従順な市民を演じつつ、彼女は内心で歯噛みをする思いでいた。

視界の端々に、市政局が掲げたスローガンの看板が入りこんでくる。

『至高の慈父』こそ究極の自己』『おんちよう恩寵の日』はあなたを見捨てない』

(何が、究極の自己よ。人間を自分では何も考えられない奴隷に作り変えて、判断するのは機械任せって事じゃない)

この都市では、十五歳になると成人と見なされる。そして、新成人が一堂に集められて成人式が行われると、一人前の市民として労働や婚姻が認められるようになるのだ。

ただし、職業も結婚の相手も、自分で決める事はできない。それを決めるのは都市の全てを管理する『至高の慈父』、旧世紀で言うところの超高度な人工知能の役目だった。

事実上一生のほとんどを決定する事柄に己の意思を介在させる事ができない非人間的な制度なのだが、文句を言う市民はいない。それは、成人の儀式で彼らに埋め込まれる小さなチップの働きによるものだった。

（ハクトが私を誘ってくれて、本当によかった。あんなものを埋め込まれて人形になるのも、ハクト以外の男と結婚させられるのなんかも、絶対に嫌）

アイラは十四歳の時、成人式を迎える直前に、同じ年の少年に誘われてこの都市から脱走した。以来五年間、こうしてたまに潜入する以外は長時間滞在する事もない。

だから、チップが人体にどのように作用するのか、正確なところが分かっているわけではなかった。しかし、こうして周囲を歩いている市民たちの虚ろな眼差しと緩慢な動作を見ると、人をロボットに貶めるような邪悪な機能を持つものである事だけは間違いないと思われた。一緒に脱走してその後結成したレジスタンスの同志であり、アイラの恋人でもあるハクトは、人間の思考を制御して『至高の慈父』に従わせるものなのではないかと推測している。

不意に後ろから複数の車輪が地面を擦る音が響き、アイラはわずかに身を強張らせた。変装はしているが、市民を監視する環境整備局の目は都市の隅々にまで張り巡らされている。行動開始前の微妙なタイミングでは、神経過敏にならざるを得なかった。

なにげない風を装って歩き続けつつ緊張を解かないアイラの横を、警備用の自動巡回ロボットたちが追い越してゆく。自分が目当てでないとは知って小さく息を吐いたのも束の間、彼女は違和感に目を細めた。

（警備ロボットが複数台同時に行動する？ それに速度も通常の巡回モードより速い……）

まさか！)

そう思った瞬間、アイラの右手前方、これから向かう目的地だった行政ブロックの中心地から轟音が響き、空に爆煙が立ち上るのぼるのが目に飛び込んできた。

「……やっぱり、始まつてる!! まだ時間には早いじゃない！」

思わず叫んで立ち止まる。周囲の市民たちが不審げに見つめてきたが、気にしている場合ではなかった。

即座に判断を下した彼女は市民の擬装をかなぐり捨てて駆け出した。

目立たないアッシュグレイのウィッグを外すと、下から艶のある赤毛がこぼれ出して長く後ろになびく。やや癖を持って波打ち、ところどころで毛先を跳ねさせている様子は、まるで灰色の世界に突如出現した炎の川だった。続いて走りながら身をよじるようにして市民の勤労制服を脱ぎ捨てると、その下から瑞々しく張り詰めた身体をびったりと覆ったダークブルーのボディスーツが現れた。

凄まじいスピードで長身を飛ばせるのはその全身に潜む強靱な筋肉の働きで、彼女の戦士としての能力の高さを示していたが、同時になだらかな肩、豊かに揺れる胸、そしてむっちりとした張り出したヒップラインはしなやかで柔らかいシルエットを形作り、女性として成熟の盛りを迎えた魅力を誇示している。

唇を固く結び、やや釣り上がった切れ長の瞳で目的地にゆらめく煙を見据えると、アイ

ラは躊躇ためらわずにビルの隙間の路地に駆け込んでいく。野生の猛獣を思わせるその美しい躍動を、その場に居合わせた人々は意思の感じられない澱んだ目で呆然と見送っていた。

頭の中に叩き込んだある都市の街路図に従って幾度か角を曲がると、やがて前方から怒声、熱風、それから連続した破裂音が流れてきて、すぐに大きくなっていった。やや行つた先で路地は切れ、ちよつとした広場のような空間になっているのが見て取れる。ベルトのホルスターからハンドガンを引き抜くと、彼女はそつと顔を突き出した。

左手奥のひときわ大きな市庁舎ビルの正面入り口に即席のバリケードが築かれ、環境整備局の武装局員たちと集まつてきた警備用ロボットが守りを固めている。バリケードの周囲には手榴弾の爆発痕もあった。その一点を囲むように、広場につながる路地の隙間やビルの窓からレジスタンスの仲間たちが激しく銃撃を加えている。

「アイラさん！」

後ろから声を掛けられ、アイラは振り向いた。そこで息を弾ませていたのは、カーキ色の野戦服に身を固め、黒髪をポニーテールに結んだアイラよりもやや若いと見える少女だった。

「レン。これはどういう事？ 予定よりも早いし、市庁舎にも潜入できてないじゃない」
「ええ。途中で見つかった人がいたそうです。それで、リーダーが作戦を切り替えて。最悪、ここで時間を稼いで整備局を足止めしておくだけになつても仕方ないって」

「しようがないわね。別働隊の方は？」

「そっちはうまく物資の奪取に成功したそうです。今、搬出を続けてます」

アイラは振り返ると、広場を見下ろすとあるビルの一室を見上げた。そこから顔を出したハクトが一つうなずくの確かめると、銃を構えて市庁舎に向き直る。

その時、バリケードの奥に一人の銀髪の女性が現れたのが彼女の目に映った。

（自らお出ましましてわけね。整備局の蛇女）

『至高の慈父』の手足となつて市民を管理し、その支配に逆らうアイラたちレジスタンスを弾圧する環境整備局の実働部隊。今姿を見せ、部下に檄を飛ばしているのは、まさしくその部隊を率いている女隊長に他ならなかった。いつも通り寸分の隙もなく制帽制服に身を固め、警棒を手にして冷酷な眼差しで周囲を睥睨している。

しばらく撃ち合いが続いたが、こちらから積極的に攻め込むつもりがないのを見抜いているのか、整備局側も防衛に重点を置いているようだった。双方に大きな被害が出ないまま、やがてハクトが笛を三度、長く鋭く吹き鳴らす。

（退却か。確かに、そろそろ潮時つてとこね）

都市の物資の奪取に向かった別働隊が無事脱出を完了した、という伝令が彼の下に到着したのだろう。後は整備局の追尾を振り切つて、この場の仲間たちが引き上げれば今日の作戦行動は半分だけでも成功という事になる。

ラに被せた。色とりどりのコードで室内の機械に接続されたそれは、頭にはめられたその一瞬、チクリとした痛みを皮膚に伝える。

「全てを委ねてしまえ。そうすれば楽になれる」

意外にも、アイラを完全に台に縛り付けた後、思わせぶりに言い残してカーシヤたちは部屋を出ていった。どういう意味だ、と投げた問いが閉じたドアに空しく跳ね返されると同時に、低い機械の作動音が聞こえてくる。

（な、何が始まるっていうの？）

半ば戸惑い、半ば怯えるアイラの目の前に、数本のロボットアームが延びてきた。先端には、何かを掴むためのようなマジックハンド、曲がった鉤、小さなブラシなど、様々なアタッチメントがついている。

その非人間的な形状に本能的な恐怖を抱いた直後、何の前触れもなくマジックハンドが剥き出しにされた彼女の胸元に降りてきた。息を呑む間もなく、先端の湾曲した棒が大きく広がって右の乳房の根元を強く挟み込む。

「んぐっ……、くああっ！」

さつきまでのチップの効果は、今は消されているらしい。絶頂の余韻を残して芯をじんじんと疼かせていた肉房は、刺激にそのまま痛みを返してきた。呻き声に反応したように一度は開いたアーム部が、今度は先程よりもやや弱めた力で締め付けてくる。

「うあつ！ ……な、なに？」

それでもなお残る痛みを噛み殺した声が困惑を含んでいたのは、それとは別に、胸の奥に甘い痺れが一筋走つたのを感じたからだつた。

機械の指は強く弱く、あるいは位置を変えて、ふるふると揺れる柔乳を弄り続けた。白い肌に赤く縞状の跡が残り、片方だけを執拗に責められたせいで明らかに右側が左よりも一回り大きく張っている。その頂点では、哺乳の突起が乳ではなく血を噴き出しそうなほど赤黒く色づき、ぱんぱんに膨れ上がって立ち上がっていた。

「あふう……。熱い……。……。むねが、あつい、くうつ……。！」

燃え上がるように脈打つ豊丘は、最後に頂点近くを軽く留められる形で固定される。動きを止めたマジックハンドに替わって次に降りてきたのは、先端が針になったアームだつた。髪の毛ほどの細さのそれは、まっすぐに一点を目指して伸びてきた。

「あ……。まさか……。！ や、やめてっ！ 今、そんなので、突かれたらっ！」

叫んで身をよじつても、手足と胸で拘束された身体は動かない。針はそのまま、突き立つたルビーのような肉豆にその先端をぷつりと浅く埋め込んだ。

「いつ、ひいいい——っ！」

わずかな痛みと、それを上回る圧倒的な快感がアイラの脳髓を掻き回す。大きく開かれた秘所で、新たな媚液がどくりと搾り出されるのが分かった。

血の跡も残さずに引き抜かれた針は、次に位置をずらして乳首と同じ色に染まった乳輪を細かく刺し貫いていく。その度に磔の女体は打ち上げられた魚のように跳ね躍った。

「やめて……。もう、やめてえっ……。！ やぶれちやうう……。壊れちやう、からあ！」

男の手にも余る豊丘を麓まで丹念に蹂躪され、叫び、喘ぎ続けた果てにアイラは貧血状態でぐったりと脱力したまま動けなくなった。股間ではこぼれた愛液が床にぼたぼた雫を垂らすほど感じさせられたものの、絶頂に到るまでの刺激はついに与えられず、生殺しの疲労感が重く身体の芯に残っている。

不意に、右の乳房を押さえていた圧迫感が消えてゆきりと肉の重さが流れるのを感じた。霞む視界に、マジックハンドが引き上げられていくのが映る。

(終わっ、た、の……?)

わずかな希望は、しかしすぐに打ち砕かれた。目の前で数十センチだけ横に動いたアームがまた降りてくる。

「あ、ああ……。あああ……」

大きく開いた悪魔の指が、再び、強く優しく女肉に恥辱を刻み込む愛撫を開始した。

やがて、アイラの胸を飾る果実の左側も右と同じ大きさに揃えられて解放される。最後には身体を震わせる体力すら残らなかったのに、脳を灼く快感の強さは変わらなかった。

「おね、がい、ゆる、して……。わたしの、おっぱい、とれちやう……。あかちゃんに、

おちち、あげられなくなっちゃうよお……」

おそらく、カーシャが相手なら同じ目に遭っても許しを乞う事などなかつただろう。しかし、目的も終着点も分からず、憎しみをぶつける姿すら見えない状態で延々と続く柔らかな性感帯への玩弄は、女闘士の強靱な意志に着実にダメージを重ねていた。

いつしか彼女は、自分が何一つ身を覆うものなく、最も秘すべき場所を宙に向けてさらけ出したまま固定された恥ずかしい格好である事すらほとんど忘れかかっている。しかし、この時になってようやく、なぜこんなポーズをさせられているのかを思い知らされる事になった。

先程までよりもずっと下の方に降りてきた二本の細いアームが、べとつく粘液に塗れて震える乙女の秘部に差し込まれた。そのまま無造作に数センチ左右に広がると、ぼつてりと盛り上がり、赤毛のエプロンに縁取られた丘が搔き分けられる。むわつと雌の臭いが広がって、濃桃色にぬらぬらと照り映える肉の湿地帯が光の下に露わになった。

「あああああ！ いやあああああ！ そんなところ！ ひどいいいいいつ！」

女としての尊厳を最底辺まで踏みにじられ、アイラは体力が尽きている事も忘れて泣き叫んだ。次に起こる事も容易に想像できたが、そんな事は考えたくもなかつた。

だが、無慈悲に動いた鉤状のアームは予想通り粘膜の裂け目に降りてくる。冷たい金属の感触に身を震わせた直後、粘い音を立てて先端が膣口から中に潜り込んだ。

たそうだ」

「な、何が目的でこんな事をする！ 黷るのもいい加減にしろ！」

羞恥を隠して、アイラは負けじと叫んだ。制服の女は淡々と続ける。

「……『至高の慈父』は、貴様の身体能力と遺伝情報を分析して、二つの選択肢を下された。一つは、我々環境整備局の局員として、治安維持のために働く事。もう一つは、優れた市民を作るため、選ばれた精子で受精して子を産み続ける母胎要員となる事だ」
冷たく響く声が告げるその内容の異常さに、アイラは耳を疑った。

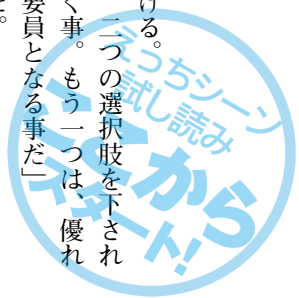
「今の調査は、貴様を母胎化するに当たって、効率よく性感を与える事ができるようにするためのものだ。チップの効果と併せて、より受精しやすくするためにな。もう一つ言うと、整備局員になる場合は子宮を摘出する。体調を安定させ、常に全力で『至高の慈父』に奉仕できるよう……」

「……あああああ——っ！ やめてえっ！ もうやめてよおおおっ！ 何よそれ、おかしい、あんたたち皆狂ってるわ！」

理解の限度を超えた選択に、愛する男と築く家族を夢見る乙女はそれこそ狂ったように暴れ出した。

「私は道具じゃない！ ハクト！ 助けてえ！ ハクト——ッ！」

「……その名のデータも残っていたな。それは貴様がつがった男か？ しかし、この都市



で与えられる快楽は、獣のような生身のセックスで得られるものと桁が違うという事はよく分かったはずだ。それでも嫌か」

「当たり前じゃない！ 気持ちのつながりもない相手に嬲られるだけなんて！」

プライドもかなぐり捨てて泣き叫ぶ娘に、その時カーシャが意外な提案をした。

「ならば、貴様と私で賭けをしてみるか」

「ううっ、ぐすつ……。な、なんですって？」

「私は、『至高の慈父』の素晴らしさを知っている。貴様は、気持ちのつながりとやらが大切だと言う。それならば、本当に優れているのはどちらか、試してみればいい話だ」

カーシャの真の意図が分からない。しかし、今のアイラに選択の余地はなかった。

「どう、すれば、いいの」

「今、採取したデータを基に貴様専用の種付けユニットを作製している。ユニットは、絶頂を示す膣の収縮を感知して精液を放出する仕組みになっているが、それをここに突き込まれて」

ぐちゅ、と湿った音を立てて、手袋をはめた指先を無造作に秘所に突き立てる。返事もできずにアイラは身をのけぞらせた。

「そうだな、十分絶頂を堪えてみせる。そうすれば、貴様にとっては本当にその男の方が魅力があるという事にして、逃がしてやろう。しかし、達してしまった場合は——」

女隊長はその時、サディストの本性を剥き出しにして舌なめずりをした。

「貴様はその時、最低限の権利すら持たない性具女として、卵子が尽きるまで子を産み、市民の性欲に奉仕するだけの存在に貶められる。どうだ？ 自信はないか？」

「……や、やってやるわよ。で、でも……」

強がりながらも不安を隠せない獲物に、カーシヤはにたりと笑ってみせた。

「安心しろ、チップの機能は切っておく。端末をここに置いて手は触れん。……そら、ちようどいいところでユニットが完成したようだぞ」

機械の作動音とともに降りてきた新たなアームの先端を見て、アイラは息を呑んだ。それは自分の前腕部ほども大きさがあり、先端は握り拳のように膨れ上がっている。アイラが知っている男性はハクトのものだけだったが、とても比較にはならない凶器だった。

「……ハハハハハ！ なかなか食欲なメス穴だな！ 今まで見た子産み女どもの玩具の中でも、一番立派だよ、ハハハハハ！」

嘲笑するカーシヤの声も耳に入らなかつた。本能が、それが自分の疼く肉裂をびつたりと埋めてくれるものだとして告げていた。

（こ、こんなものに負けるわけにはいかないんだ……。ハクト、私を守って……！）

「……では、早速始めるとしようか。まずは下ごしらえからだな」

「なんだとつ、それは一体、あはあつ！」

カーシヤの宣言とともに、マジックハンドのアームが乳房の上に降りてくる。攻撃されるのが性器だけだと思っていたアイラは戸惑いの声を上げるが、白い柔球をやわやわと揉み込む動きに、つい喜悦の喘ぎが漏れた。

(な、なんだこれ……！ さっきの動きと全然違う！)

「先程の脳波を測定しながらの調査で、貴様の全身の性感帯と最も効果的な刺激の方法を記録している。機械には感じないと言うのなら、せいぜい耐えてみせろ」

「んんっ……！ くふううっ！」

双丘を同時に揉みしだかれながら、その頂点で色づく突起が交互に湿った感触に吸い上げられた。ぬらぬら光りながら一層膨れ上がる肉豆が、こりこりと上から押し潰される。濡れた柔片は、その時にはのけぞる首筋を舐めていた。

(こっ、これ……！ この動き……っ！)

間違えようはずもない、それはハクトが愛してくれる時のいつもの手順だった。

守ってほしいと、愛する男の顔を思い浮かべていたのが、そのまま仇になる。身体に刻み込まれた記憶が意思とは無関係に女芯を昂らせ、秘所をじわじわと潤ませ始めた。本来なら、恋人の体温に、匂いに包まれて幸せのうちに上る階段を、無機質な機械に囲まれた部屋で、無感情に動く鋼の腕に、強制的に引き上げられようとしていた。

「止めてよお……。こんなの、酷い……」

閨の秘め事を人前に引きずり出される恥辱に、赤毛の戦士は子供のように泣いた。その唇にカップのようなユニットが張り付き、舌を吸い出して濡れた感触でねぶり回す。

「……んんうーっ！ んほおっ！」

機械による擬似ディープキスと同時に、片方の指が胸の快楽を掘り返しつつ、もう片方のアームが脇腹からへそ、さらにその下へと回り込んでいく。安産型と揶揄された重く張り詰めたヒップは、ハクトも気に入りの性感帯だった。

乳房以上の執着を込めてぐにぐにと美肉を歪められる度に全身が引きつり、深い谷間とその奥の窄まりまで、上の泉から垂れた粘液がべとべとと粘つかせる。

「……んぷっ！ あぐっ！ んぐううっ！」

必死に声を堪えながら、しかし身体は次の責めへの予感に震えていた。自分のセックスが、恋人の愛撫に最も反応するように教え込まれているのなら、この次に来るのは――。

「んひいいいっ！ くおう——っ！」

精一杯歯を噛み締めて予防していても、漏れた声は高く掠れ、切れ長の瞳は白目気味に裏返った。尻肉を掴まれたままの腰がぐくぐくと躍り、媚液が雫を跳ね飛ばす。

包皮を脱ぎ捨て、てらてらと膨れ上がった肉の核に吸い付かれる刺激はそれほどに強かった。ハクトとの交歓では、大抵ここを責められて一度達してしまうのだった。

「どうした？ メス穴に突っ込まれる前に、もういつてしまうのか。ご大層な乳タンクと

重い尻たぶをぶら下げてるだけあって、いつでも発情期という事らしいな？」

側で見守るカーシャも、いつしか怜悯な隊長の仮面を脱ぎ捨てていた。下品な言葉で悶える獲物を嬲りつつ、頬には血の色を上せている。

「まだ始まってすらいないぞ。貴様の男に、ハクトに申し訳ないと思わないのか？」

「……イッてない！ イッてなんかいない！ お前の口から、その名前を出すなあつ！」

はしたなく広げられた両脚の中心で、糸を引きながら限界まで陰唇を左右に開かれて挿入の準備を整えられつつ、アイラはむせび泣いた。気持ちのつながりと言い、恋人との誓いと言いながらも、ほとんど無抵抗で感じさせられるままの自分の身体が情けなかった。

（なんで？ なんで耐えられないの？ 人の気持ちって、こんなにも弱いものなの？）

涙に霞む視界の向こう、濡れてけば立つ恥毛の中心に、凶悪な太さの責め具が狙いを定めるのが見える。これだけは、ハクトのものとは全く違っていた。

今、こんなもので奥まで突かれたらその場で終わってしまうかもしれないという恐怖とともに、いつそ全てを解放して乱れてしまいたい、楽になりたい、というかすかな投げやりな気持ちがちらりと心の奥底を掠めるのを感じた。

「さあ、ここからが、本番だ——！」

カーシャの宣言とともに、人造の剛直がぬぷりと膣口を押し広げる。かつて経験がないほどの太さを受け入れているはずなのに、痛みは全く感じなかった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>